

氏名（本籍）	マオ 毛	ヤ Y（中国）		
学位の種類	博士	（音楽学）		
学位記番号	博音	第107号		
学位授与年月日	平成19年	3月26日		
学位論文等題目	〈論文〉二十世紀後半における中国箏の変遷－楽器改良を中心に－			
論文等審査委員				
（総合主査）	東京芸術大学	助教授	（音楽学部）	植村幸生
（副査）	〃	教授	（ 〃 ）	安藤政輝
（ 〃 ）	〃	〃	（演奏芸術センター）	松下功
（ 〃 ）	〃	助教授	（音楽学部）	塚原康子
（ 〃 ）	〃	非常勤講師	（ 〃 ）	尾高暁子

（論文内容の要旨）

本論文は、楽器学の観点から、主に中華人民共和国成立から今日に至る、中国大陸で行われた箏の楽器改良の変遷軌跡を解明する。そして東アジア文化圏にありながらグローバル化を経験している中国箏の今日的な位置付けについて叙述し、さらに筆者自らが新たに取組んでいる古箏の改良および、その今後の創造的可能性と国際的芸術性について展望し位置づけることが本研究の目的である。

論文の構成は序論「本研究の目的と研究方法」、第一部「中国箏を中心とする東アジア箏の概観」、第二部「中国各地域における箏の改良」、第三部「中国箏改良の変遷と課題」、結論の五つの部分からなる。

序論 本論文の研究目的、研究対象及び研究方法を叙述した部分である。

第一部 第一章は、まず文献や文物を通じて、近現代までの中国箏の変遷や周辺国への伝播を概観する。そして、従来の研究を、古箏専門の研究と中国民族楽器の全般的研究のなかでの箏の研究という二つの視点から整理し再検討した。第二章は、「東アジア箏」という観点から、近現代における日本箏と韓国伽倻琴の改良について概観した。第三章は、今日における中国箏の名称、楽器構造、流派、楽譜、つまり中国箏の現状について叙述した。そのうち特に楽器構造と流派の二つの部分は、第二部の内容と直接的な関連性がある。

第二部 本論文の中心部分である。文献や従来の研究を検討した上で、主な箏曲流派に沿って筆者が行った現地調査の成果に基づき、中国各地（北京、瀋陽、鄭州、西安、蘇州、上海、潮州、広州等）の改良事情を、第一章「演奏者を中心とした改良活動」と第二章「製造者を中心とした改良活動」の二部分に分けて、詳細に叙述した。第三章は、上記二章の内容に基づいて、各地における箏の改良事情を年代にわけて総合的に分析した。ここでは、現在までの古箏の改良が「二十一絃箏への改良」と「転調箏の開発」という二つの方向性に集約されることを解明した。

第三部 第一章は、伝統の十六絃箏から二十一絃古箏に改良したことによって、楽器本体や付属品にはどのような変化があったかについて、分析した。また、S型二十一絃古箏の定着における社会的要因を検討した。第二章は、転調箏を問題にする。まずこれまでの転調箏の開発にあった長所・短所を検討した。古箏には「自由に転調出来ない」という欠点が存在するが、これを解決するため、箏類楽器本来の特徴である移動可能な箏柱を最大限に活用するという考えに基づき、新たな転調箏を設計した。設計にあたっては筆者が日本箏改良の成果から得た知識と技術を参考にした。本章ではその設計と試作の過程を提示した。

結論 結論は次の諸点にまとめられる。①二十世紀後半における中国箏の改良は、「二十一絃箏への

改良」と「転調箏の開発」という二つの方向性に集約される。②二十一絃古箏で絃数の増加以外に改良されたことは次の五点である。(a)共鳴体が拡大された。(b)龍甲の湾曲の度合が小さくなった。(c)絃を留めるピンが龍尾から龍角に変わった。(d)雲角の形がS型に定着した。(e)絃の素材が金属製から、鋼線・銅線・絶縁線・ナイロン線の四つの組み合わせに変わった。③S型21絃古箏の普及定着には、プロ奏者の演奏活動より、むしろ児童への普及教育活動が大きな役割を果たしていた。④これまでの転調箏が失敗した原因は、金属製の機械を付加したことで、楽器本体が重く大型になり、箏本来の音色を変質させたことである。⑤改良箏の位置付けに関して、日本と韓国においては改良箏と伝統箏は共存関係にあるため、改良箏は「新しい楽器」として捉えらえるのに対し、中国においては二十一絃古箏の定着とともに、伝統箏がそれにとって代わられたため、改良箏は「改良楽器」として捉えられている。ただし、「転調箏」については中国でもまだ一般的に認められておらず、現在中国箏界では「新しい楽器」として扱う。⑥独奏楽器としての古箏にとって「転調問題」は未だ解決されておらず、その点が中国箏の国際舞台への大きな壁となっている。筆者自身による転調可能な古箏の設計・試作によって、今後、中日韓三国の箏の共演が容易になると期待される。このように古箏が創造的で将来性を備えた「東アジア箏」として国際的に芸術性を拡大発展するよう導くことが、筆者の本調査研究の目標であり、これは演奏家として筆者が将来にわたって取り組むべき作業である。